

# ドレスデン、運命の日

2007(平成19)年4月3日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督＝ローランド・ズゾ・リヒター／出演＝フェリシタス・ヴォール／ジョン・ライト／ベンヤミン・サドラー／ハイナー・ラウターバッハ／カタリーナ・マイネッケ／ズザンネ・ボルマン／マリー・ホイマー／カイ・ヴィージンガー／ポール・レディ／クリスチャン・ロドスカ／ピップ・トレンス／ジョン・キーオ（アルバトロス・フィルム配給／2006年ドイツ映画／150分）

## 第2章

面白くてためになる

……共に第二次世界大戦の敗戦国でありながら、東京大空襲の約1カ月前に起こったドレスデン大空襲を日本人はほとんど知らないはず……。戦後62年を経た今、ドイツ人監督が巨額の費用と厳密な時代考証を経て、再現させたその姿は迫力いっぱい……。東京と異なり、石でできたあの美しい都市が、1日にして壊滅していく様子は衝撃的！ ドイツ人看護婦とイギリス空軍パイロットとの恋というドラマティックな演出と、爆撃によって引き裂かれた家族たちの悲劇をじっくり味わいながら、あらためて平和の大切さを考えてみたいものだ……。

## ドイツでも戦争映画の名作が次々と……

日本では昨年大ヒットした『男たちの大和／YAMATO』（05年）に続いて、今年は5月12日から石原慎太郎製作総指揮・脚本の『俺は、君のためにこそ死ににいく』（06年）が公開されるため、「あの戦争」と特攻隊を描いた映画について若い人たちがどのような反響を示すかが注目されている。それと同じように（?）、ドイツでも近時『ヒトラー～最期の12日間～』（04年）という話題作がつくられたし、東西ドイツの壁の崩壊と統一をテーマとした『グッバイ、レーニン!』（03年）や『善き人のためのソナタ』（06年）がつくられた。

そして今回は、「ドレスデンの悲劇」を描いた大作が登場した。英米空軍によるドレスデンの大空襲は、1945年2月13～14日にかけてのこと。もちろん、日本

には広島と長崎の原爆の悲劇があるから、これを風化させることなく全世界に発信していかなければならず、近時黒木和雄監督の『父と暮せば』（04年）などの名作が登場している。そしてそれとは別に日本にも、1945年3月10日の東京大空襲の悲劇を描いた工藤夕貴主演の『戦争と青春』（91年）や『あした元気にな～れ！～半分のさつまいも～』（05年）等がある。

したがって、こんな映画を契機として、日独の空襲の悲劇を対比してみることも大きな意義があるはずだが……。

### 正確な時代考証にこだわりを……

この映画は、ドレスデン空襲によって引き裂かれた家族と恋人たちの姿を描くフィクションだが、同時にドイツ人監督のローランド・ズヴ・リヒターは、それとドレスデン空襲という歴史的事実を可能な限り正確に観客に伝えたいという強いこだわりを全面におし出している。そのためこの映画には、時代考証の担当者として3人の歴史家が参加し、歴史的・軍事的な背景は事実と正確に合致しており、双方公平に表現しているとのこと。

映画の前半、ドイツ人看護婦アンナ（フェリシタス・ヴォール）とイギリス空軍パイロットのロバート（ジョン・ライト）とのラブストーリーの合間に見るドレスデンのまちは壮大で美しく、ナチス・ドイツの降伏がすぐ間近に迫っているとは到底思えないもの。

これは、英米空軍によるドイツ空襲の重点が当初ドイツの西側の都市におかれたことにより、ドイツ最東部に位置するドレスデンは後回しになっていたため。ところが、そんなドレスデンのまちが映画後半は主役となる。

### ドレスデンのまちは……？

プレスシートによると、この映画は製作費1000万ユーロというドイツ映画としては破格的規模の大作で、ドレスデンのまちの巨大セットを建造したということだが、一体このセットの建造とその破壊にどれほどの費用をかけたのだろうか……？ CGを多用した映像テクニクに頼らない迫力と時代考証のこだわりには、さすがドイツ人監督とビックリするはず。

また、東京大空襲（1945年3月10日）や大阪大空襲（1945年3月13～14日）とドレスデン空襲が決定的に異なるのは、木と紙の建物と石の建物との違い。そのことが、この映画を観れば実によくわかる。それは、日本人だけしか実感できない感覚だろうから、その点も十分意識しながら観てもらいたいもの……。

また、私がプレスシートを読んでビックリしたのは、ドレスデンのまちの総面積が320km<sup>2</sup>で人口が47万6千人だということ。ちなみにこれは、大阪市の総面積の221.11km<sup>2</sup>の約1.5倍であるのに対し、人口は大阪市の263万人（2007年1月1日現在）の約5分の1。少子高齢化と人口減少が心配されている今の日本で、さてこれをどのように解釈すればいいのだろうか……？

### イギリス兵との恋はやはりちょっとムリ筋……？

SHOW - HEY シネサークルの会報「わらじ通信」創刊号で、私が1～3月期の「THIS IS BEST!」に挙げた映画『ブラックブック』（06年）におけるユダヤ人女性とナチス・ドイツ将校との恋のように、ヨーロッパ映画では敵国同士の男女が心惹かれあい、愛し合うことがたまにあるが、『ドレスデン、運命の日』もその一例。すなわち、ドレスデン空襲の中でハイライトを迎えるこの映画における男女の恋は、大学教授である父カール（ハイナー・ラウターバッハ）が病院長を務める病院で看護婦として懸命に働いているアンナと、イギリス空軍パイロットのロバートとのラブストーリー。

乗っていた爆撃機がドイツ戦闘機によって撃墜され、非常脱出用パラシュートで地上に降り立ち、敵地の中でただ1人逃げ歩き、今アンナの勤務する病院の地下に隠れ潜んでいるのがロバート。そんな2人が知り合い、なぜ惹かれあい、そして遂には婚約者だった医師のアレクサンダー（ベンヤミン・サドラー）と別れてまでロバートと一緒に……ということになったのか……？ それがこの映画の描く「戦火の中のラブロマンス」だが、私の目には、イギリス兵との恋はやはりちょっとムリ筋……？

### アレクサンダーも立派な医者だが……

ナチス・ドイツの敗北が迫っていても、看護婦として懸命に働いているアンナ

は、そんな実感をもつヒマがないかのように仕事に精を出していた。そして、婚約者アレクサンダーとの仲も順調のようだから、ある意味アンナは幸せいっぱい……？ したがって、観客席から観ていると、むしろアンナの方がアレクサンダーとの結婚に積極的な感じで、愛の詩を朗読させてプロポーズさせるアンナの天衣無縫な明るさを見ていると、戦争末期とはとても思えないほど……。

しかし、そんなアレクサンダーとの恋も、ロバートの登場によってアンナの心に微妙な揺れが……。この映画のストーリー展開の中、アンナの父親のカールと同様、アレクサンダーの生きザマや医師としての姿勢なども少しずつ明確にされていくから、是非それに注目を……。私が観る限り、このアレクサンダーは小さい時からの努力を重ねてやっと現在の職業と地位を手に入れ、美しい病院長の娘との幸せな婚約に臨もうとしているのだから幸せそのものだが、やはり人間の魅力はロバートの方が上……？

## 最高のベッドシーンの再現……？

ジュード・ロウの出世作となった『スターリングラード』(01年)は素晴らしい映画だったが、その中でも、膠着状態を続けるスターリングラードの市街戦の中、精神的にも極限状態になっている2人が雑魚寝状態の中で展開したベッドシーンは最高だった(『シネマルーム1』9頁参照)。そして、『ドレスデン、運命の日』ではそれを再現……？

地下室の一角に潜んでいたロバートがゲシュタポの目を避けて病室のベッドの中にもぐり込むのを、機転をきかせて助けたのもアンナだったが、一体それはなぜ……？ また、ドイツ語をしゃべっていてもそのクセからロバートがイギリス兵だと見抜きながら、婚約者のアレクサンダーとは違うやさしさと包容力を示す彼に強く惹かれていったのはなぜ……？ そのうえ、逃亡兵を匿った女性がゲシュタポに銃殺されるのを目撃してショックを受けたアンナが、その夜秘かにロバートのベッドの前に立ったのはなぜ……？

寝静まった病室の一角にあるベッドの上でくり広げられる2人のベッドシーンは、まさに「これぞ秘めゴト」の極致であり、思わず固唾を呑んで見守ってしまう最高のベッドシーン……。

## 父親のカールは悪い……？

この映画はある意味ドレスデンのまちが主役だが、その主役を活かすためにはアンナやロバートたちが織りなす人間ドラマが重要。さらに、アンナとロバートのラブロマンスとその純粹性・理想性を際立たせるためには、それと対置される現実を見据えて生きる人間ドラマが必要。

そう考えた(?) ローランド・ズゾ・リヒター監督は、アンナの父親カールをそんなちょっとズルイ現実主義者に……？

映画の冒頭、空襲警報が鳴る中、逃げずに気丈に手術を続けるアレクサンダー医師とそれを補助するアンナの姿が映し出されるが、そこで暗示的に示されるのがモルヒネの不足。ところがなぜか、地下に潜むロバートが見たのは、1人地下に下りてきたカールがロッカーの中に大量のモルヒネを隠している姿……。また、官と民の癒着は世の習いだから、ナチス幹部と病院長の結託によりさまざまな策謀がめぐらされていたとしても、現実問題としてそれはあり得ること……？

しかして、今カールが考えているのは、空襲の危険、ドレスデン陥落の危険が迫っている中、ナチス幹部の力を利用しての国外脱出。すると、そのためには……？ そんな風に考え、着々と計画を実行してきたカールは決してワルではないが、ズルイことはたしか。しかしそれは、カールに言わせると、あくまでアンナたち家族の幸せのため……。

## ユダヤ人問題も少し……

ナチス・ドイツ敗北直前のユダヤ人迫害の物語は、『ライフ・イズ・ビューティフル』(98年)や『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』(99年)でタツプリと描かれているが、この『ドレスデン、運命の日』にも、ドレスデンから強制収容所へと送られるユダヤ人の姿が少し描かれている。そんなサブストーリーの中で重要な役割を果たすのは、アンナがロバートと逃げていくのを助けようとする、アンナの親友の女性マリア(マリー・ボイマー)とその恋人のジーモン(カイ・ヴィージガー)。

英空軍を主力とした合計796機の爆撃機によるドレスデン空襲は、1日にして

あれほど美しかったドレスデンのまちを壊滅させたが、その被害はドイツ人もユダヤ人もそしてイギリス兵のロバートも分け隔てることがなかったのは当然。

そんな大爆撃の中、アンナたち家族の安否とともに、マリアとジーモンの安否は……？

## 聖母教会再建の思いは……？

映画後半、圧倒的迫力で迫るドレスデン爆撃が終わり、さらにその後の人間ドラマも終わった後、スクリーン上には再建された聖母教会の美しい姿が登場する。これは、1994年から瓦礫を可能な限り元の場所に戻すという大変な作業で再建が進められたものだ。

日本はスクラップ&ビルド方式が多いが、歴史や歴史的建造物にこだわるヨーロッパの人々は、失われたものを再建するケースが多い。そういう意味では、「世界最大のパズル」と呼ばれたこの聖母教会の再建はその典型。

ナレーションの中で語られる聖母教会再建の思いは、ドレスデン市民やドイツ国民には共通するものだろうが、残念ながら日本人にはそれは少しわかりにくいもの……？

したがって、戦後62年を経た今、こんな映画を通じて、日独両国民があらためてあの戦争を真剣に考えたうえで、現在の平和のありがたさを確認する必要があるのでは……？

2007(平成19)年4月4日記